

温品

ぬくしな

歴史再発見 ～ふるさと散策

水車による産業振興

The Waterwheel and Industrial Developments

温品川(府中大川)の急流は、水害で人々を苦しめましたが、大正の初期までは水流を利用した水車がたくさんあり、川の恵みを受けていました。

温品川の急流を逆手にとって、この水流を利用した水車で精米が盛んとなり、大消費地の広島へ出荷していました。

最盛期には水車が30か所もあり、精米業として発展し、もみ米や玄米は、温品村近隣はもちろん賀茂郡や高田郡の村々からも搬入されていました。搬入や出荷には馬が使われて運送業が発達し、仲買人や商人がたくさん出入りして、にぎわいました。しかし、明治27年(1894年)広島に鉄道が開通するなどで、温品の小規模な精米業者は消滅してしまいました。

精米業に代わって、水力を利用した製綿業が登場しました。綿花は近隣の村々や太田川流域の地域から搬入されて、製品となって広島市場に出荷されました。この頃には、運送は馬から馬車に代わり街道はにぎわいました。しかし大規模な製綿工場の出現によって、10年余りでその繁栄は終わりました。

大正5年(1916年)に温品に電気が通じ、電動機の採用、また大正15年の大水害で水車はすっかり姿を消しました。その後の河川の改修もあり、現在は水車の位置はほとんどわからなくなりましたが、温品の貴重な産業の歴史なのです。



復元された水車(安佐北区狩留家)



復元された水車(安佐北区狩留家) (提供:NPO 狩留家)